

支所だより

東予・丹原・小松の各総合支所管内での、身近な出来事や話題などを紹介するコーナーです。

東予総合支所

〒799-1394 周布349番地1 TEL0898-64-2700 FAX0898-65-4363

カブトガニの棲む環境を守るために
～東予・丹原地区の下水道～

昭和58年度に着手した東予・丹原地区の下水道事業は、約8年の歳月をかけ平成2年度末に供用を開始しました。現在では、計画面積543.5ヘクタールの内421.82ヘクタールでの利用が可能となっており、1日当たり最大で約1万立方メートルの汚水を処理しています。

この下水道を利用いただける区域内には約12,000人がお住まいですが、利用率は80パーセント(9,700人)程度にとどまっています。汲み取り式トイレや単独浄化槽を使用し、未だ下水道に接続していない約20パーセントのご家庭では、



東予・丹原浄化センター

生活排水がそのまま近くの側溝や水路へ流れている状態となっているのです。

下水道が整備される以前には、家庭や工場の排水の多くが川や海へそのまま流されていました。しかし、工場排水に対する規制が進んだ現在では、水質汚濁の主な原因は生活排水であると言われており、その早急な対策が求められています。下水道に接続することによって、生活排水は地下に埋設された管で浄化センターへ送られ、きれいな水にしてから海に戻すことができます。



カブトガニの棲む海

下水道利用可能区域の皆さんが接続することで、地域一帯の水環境が大きく改善されます。カブトガニの棲む海を将来に残すために、私たちの快適な生活環境を守るためにも、下水道事業へのご理解とご協力をお願いします。

丹原総合支所

〒791-0592 丹原町池田1733番地1 TEL0898-68-7300 FAX0898-68-4769

郷土の発展に尽くした偉大な先人
～越智茂登太翁の足跡～

中川公民館には、旧中川村歴代村長の肖像画が今も飾られています。その中には、明治26年から47年もの長きにわたり村長を務めた越智茂登太翁の姿もあります。34歳の若さで村長となった茂登太翁は、村政発展のため劈巖透水路(*)の改修事業をはじめ、バス会社・製紙会社・林業・畜産業など地域産業の振興に努めました。



茂登太翁の肖像画

そうした功績を称え、来見集会所の近くに頌徳碑が建立されたのは昭和24年のことでした。その碑には村長だけでなく、郵便局長や農林業会委員・会長、県会・郡会・村会の各議員、県議会議長など茂登太翁が歴任した多くの要職

が刻まれています。

現場では自ら先頭に立ち、村民のための政治を貫き通した茂登太翁。80年の生涯を閉じるまで自治・産業振興に尽くした功績に対し、90余回にわたる表彰とともに従六位勲六等を受章されるなど、その足跡はいつまでも記憶に留めておきたい郷土の偉大な先人です。



「伊予の青の洞門」とも呼ばれる劈巖透水路

*劈巖透水路(へきがんとうすいり)：中山川左岸の岩壁を貫く灌漑用水路。安永9(1780)年、当時の来見村庄屋であった越智喜三左衛門が、水不足に苦しむ農民のために私財を投じ、自らものみを振りながら約9年の歳月をかけて完成させた。茂登太翁は喜三左衛門の子孫にあたる。

小松総合支所

〒799-1198 小松町新屋敷甲496番地 TEL0898-72-2111 FAX0898-72-4048

みんなの力で未来に残す『明穂の里』
～小松町明穂地区ほ場整備事業～

小松町明穂地区は、小松町の西部に位置する農業集落です。今から11年前、この地区で「みんなて歩こう、未来を描く明穂の里」というワークショップが開催されました。

そのきっかけは、地区で実施されることとなったほ場整備事業でした。事業の実施に当たり地域の皆さん自らが、農業を取り巻く環境や生活・自然環境、さらに歴史的遺産などについて、地域の見直しを行うこととしたのです。小さな子どもさんからお年寄りまで多くの住民が参加した取り組みでは、実際に地域を歩いて点検を行い話し合いを進めました。ワークショップ推進委員会の会長を務めた佐伯博さんは、「ワークショップによって地域の問題点をみんな考えて共通の認識とすることができました。また、普段



ほ場整備後の明穂地区の農地

は何気なく見過ごしている風景に、自慢できる所や今後も残しておきたい所があることなどを再認識することにもつながりました。この活動は、いつまでも残したい明穂の里を考える、よいきっかけになりました」と、当時を振り返ります。

平成15年度から19年度にかけて、明穂地区の21.5ヘクタールで実施されたほ場整備事業では、道路や用排水路が整備され、農地集積が進み作業の効率化や生産性が向上しました。地域の皆さんからは「もっと早く実施していればよかった」との声が聞かれるほどでした。

高千穂の杉や新池土手の水仙など、10年以上前に「今後も残したい」と話し合った自慢の風景は、美田となった農地とともに、今も明穂の里に受け継がれています。